社会とともに歩む土木学会

椛木洋子
論説委員
(株)エイト日本技術開発
国土インフラ事業部
技師長

土木はくらしと命を守り、人を豊かに、幸せにすることが究極の目標であると考えている。

「社会とともに歩む土木学会※1」と土木学会自らを位置づけるのであれば、まず、「社会の土木学会に対する期待・要望」を的確に把握する必要があると思う。では、直接的に、社会に対して、「土木学会に何を期待しますか」と質問をしてみよう。土木業界あるいは、土木関連に身を置く人であればまだしも、「社会」の中でこの問いに答えられる人はそう多くはないであろう。

先ずは、土木学会がどのような組織なのか。「学会」であるから、学術的な研究をしているということは想像できるが、何を期待しますかと問われても、組織の実態がわからないから、自分の日常と結び付けて考えることができず、どんな支援が得られるのかもわからない。逆に、そもそも、「土木」って何ですか、「土木学会」は何をしているところですか、と質問されるに違いない。

土木学会から広く外部（社会）に向けた発信として、報道発表、市民向け講演会、教育の場への出前授業、現場見学会、調査団報告など、本部および支部を問わず、以前より、高い頻度で実施されるようになっている。これらの情報発信は、社会のニーズに本当にこたえているのだろうか。一方通行の発信になっていないか、今一度省みる必要があるのではないか。

土木学会の主要な活動の柱である調査研究部門における成果は、学会内に「知」として集約され、各種報告書、専門図書、技術基準・指針等に反映されることで、専門家の中で有効活用されている。これにより、間接的には、その知が社会に還元されることで社会に役立てられていると言える。しかしながら、社会的に大きな影響を与えかねない技術基準等は、それを決めるに至った前提条件があること、すなわち自然を相手にする場合に「絶対」はないという土木工学の限界についても併せて説明し、納得頂く必要があるのではないか。専門家でなくても様々な自然現象や災害に問題意識を持っている人は、土木学会に期待することも大きいであろう。また期待が大きい分、それにこたえることができなかった場合は、土木学会への失望も大きいに違いない。技術の専門家集団としての土木学会に対する社会の信頼を裏切ることがあってはならない。

また、土木学会は、中立性・公平性を保持する組織として、複雑な利害関係の中にあっても、合意形成を図ることができる組織であるはずである。今後は、成熟した社会を前提として、「土木工学」の限界も明らかにしたうえで、土木学会が中心となって丁寧に説明し、合意形成をはかり、一人一人が豊かにかつ安全にくらせるように、的確な情報提供や支援策が必要なのではないかと思う。

最近は、一般の方に向けて直接的に発信される成果も多くみられるようになった。この数年でも、専門外の方をターゲットとした図書がいくつか発刊されている。例えば、「家族を守る斜面の知識～あなたの家は大丈夫？～」（地盤工学委員会斜面工学研究小委員会編：2009 年 10 月発行）、「津波から生き残る－その時までに知ってほしいこと－」（津波研究小委員会（地震工学委員会・海岸工学委員会津波被害推定および軽減技術研究小委員会）：2009 年 11 月発行）などは、いずれも、主に専門外の方を対象としたわかりやすい本であり、比較的低廉な価格であることからも社会への普及を期待した図書であると思われる。

大変残念なことであるが、このような素晴らしい本の発行後も、毎年のように日本各地で台風やゲリラ豪雨に伴う斜面災害により、甚大な被害が生じている。また「津波から・・・」の本が、東日本大震災の１年半前に発行されていたことを後で知り、大変悔しい思いをした方も多いのではないか。このような良書の普及こそが、人々の豊かで幸せなくらしを守る第一歩ではないかと思う。

土木学会という学術団体が、社会とともに歩むためには、専門家としての研究成果を「知」として集約し、情報発信するだけでは不十分である。それを的確に社会に還元する－社会に広く理解頂き普及させる－ことが必要なのだと思う。そこまできて初めて、社会とともに歩む－社会に期待される－専門家集団として直接的な社会貢献ができたと言えるのではないか。

※1：土木学会パンフレット
http://www.jsce.or.jp/outline/whats/panf_hp.pdf